

指導行政のポイント

だから“総合”はやめられない！

菱村 幸彦

さる2月13日、文部科学省の主催で「総合的な学習の時間」の研究発表会が開催された。「だから“総合”はやめられない！」というお役所らしからぬキャッチコピーに引かれて参加した。

総合学習の重要性を再認識

研究発表会は、文科省の新庁舎内の講堂で開催されたが、600人定員の会場は、全国からの参加者で満席となり、日ごろ総合学習に取り組んでいる先生たちの熱気であふれた。

研究発表会では、シンポジウム、実践事例発表、ポスターセッションなど、いずれも熱のこもった議論や発表が続き、なかなかの盛り上がりだった。シンポジウムに登壇したパネリストは、いずれも総合学習の重要性と有用性を強調したことは言うまでもない。中でも前経済同友会代表幹事の北城恪太郎氏が、これからの社会で求められる能力は、自ら問題を発見し、自ら考える力であることを強調し「全国の先生方は総合学習の実践に自信を持っていただきたい」と繰り返し呼びかけていたのが印象的だった。

優れた総合学習の実践事例の発表を聞いて、改めて総合学習の効用を認識した。しかし、半面、発表された事例は、選ばれた特別の実践だという思いが否めなかった。こうした優れた実践を、全国の学校にどこまで期待できるだろうか。

私は、どちらかといえば、総合学習については、消極論の立場をとってきた。それは私自身の苦い体験のゆえである。戦後、新学制がスタートしたとき、私は中学校でコア・カリキュラムに基づく生活経験学習の授業を受けた。それは、生徒に学習テーマを選ばせ、調べさせ、発表させて、それでおしまいという授業だった。戦後の生活経験学習について「はいまわる経験主義」という批判があるが、まさにそれだった。今も、あれはつまらない授業だったとい

う印象しか残っていない。総合学習が始まると聞いたとき、そんな授業になることを懸念したのだ。

もっとも、あの時代の生活体験学習はすばらしかったという人もいる。私の知人に生活体験学習の授業で、ジャーナリストとしての能力が養われたと、中学時代の授業を懐かしむ元記者がいる。

今回の研究発表会で、広島の中学生在が「総合学習でバラバラな知識をつなげることができた」とその意義を述べていた。この生徒は、大人になって、中学校でいい授業を受けたと回想するに違いない。

理念と現実のギャップを埋める

総合学習のねらいである「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する」という理念に異論はない。しかし、これを実現することは容易ではない。研究発表会で、フロアから「すばらしい実践だが、とてもまねできない」という声も出ていた。

総合学習は、やり方によって効果に大きな差が生じる。そのことは過去10年の実践で明らかだ。理念と現実のギャップをどう埋めるか。総合学習の効果をどう平準化するか。これが総合学習の課題であることに変わりはない。

新指導要領は、総合学習について新たに章を立て、充実のための留意点を示している。そのなかでは、特に次の3点が重要ではないか。

- 育てようとする資質・能力・態度、学習活動、指導方法、学習評価の計画を示すこと。
- 各教科、領域で身につけた知識や技能等を相互に関連づけること。
- 教師が適切な指導を行うこと。

全国の学校で「だから“総合”はやめられない」となる日は来るだろうか。

(ひしむら・ゆきひこ = (財)学習ソフトウェア情報研究所 理事長)

■最新刊！

菱村幸彦【著】 B6判・定価2,205円

教育開発研究所

全訂新版『はじめて学ぶ教育法規』 法改正を踏まえて全面改定！

『理数教育充実への戦略』 星野昌治・廣田敬一【編】 A5判200頁・定価2,520円

研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、無料FAX 0120-462-488 をご利用ください(24時間受付・即日発送)